

# 「親しい友人」のはなし。



## はなし のたね

hanashi no tane



日本、米国、ドイツ、スウェーデンの4カ国を対象に実施された内閣府の調査で、日本の高齢者の約3割が「親しい友人がいない」と回答していることが分かりました。各国それぞれの数値は日本が31.3%、米国が14.2%、ドイツが13.5%、スウェーデンが9.9%となっており、日本が突出していることが分かります。単に友人ということだけでなく近所づ

きあいの希薄さも目立っており、高齢者の孤独防止策が急務だと叫ばれているようです。

ただこれは一概に問題だと断言できません。なぜなら「友人」というものに対する定義があまりにも曖昧だからです。学生時代や若い頃ならば、よく一緒に買い物に行く、カラオケに行く、お互いの家を行き来する、など明らかに友人と呼べるような行動を取る仲間がいて、それを友人だ、と特に深く考えずカテゴライズしていました。ところが大人になって時間の制約が厳しくなると、学生時代はそれこそ毎日会っていたようなヤツでも平気で一年に一回とか数回という頻度になります。ましてこのコロナ禍でさらにそうした接触は減っているでしょう。でもたまに会うと話に華が咲きいつまでも一緒に居られる・・・そんな仲間はきっとずっと「友人」ですよ。会う回数や頻度では友人の定義づけはできません。もちろん高齢になっても頻繁に一緒に遊んだり他愛もない話ができる相手がいるのは素晴らしいことです。ただその相手が、自分が苦しいとき、例えば足腰を悪くして自由に動けなくなったときに助けてくれるのかということそんな保証もない。友人と呼べる相手がいるから安心、ということには結びつきません。あと難しいのは「こっちが友人だと思っても向こうはそう思ってない」という悲しいパターンもあります。今回の高齢者の例でも、3割が親しい友人がいないと回答したということは逆に言えば7割は「いる」と回答したということですよ。でもその7割の人たちが「コイツは俺のダチだぜ」と思っている相手は、しょうがないから話に付き合っやってる、という認識かもしれない。さらにこれもどうしようもないことですが、65歳以上の高齢者ならもう友人と呼べる人がこの世を去ってしまっている可能性も高いと思います。でも自然の摂理なのでどうしようもない。

「何をもって友人とするか」というのは主観的な要素が大きすぎて一概に決め付けることはできないと思います。私個人の友人の定義は「同じ思い出を共有しているかどうか」という点です。その思い出がセンセーショナルであればあるほど深い友人だと感じてしまうので、自ずと感受性の強い幼少期や学生時代の仲間がその対象になってきます。でも大体の方がそうですね。やっぱり大人になって職場や取引先で知り合った相手には、どこか見返りを求めてしまったり、この人は自分に何をしてくれるんだろうとか打算的な目で見えたりします。

だから高齢者になってしまえばますます「友人」と呼べる存在を作ることは難しいと思います。ましてや「親しい」ともなればさらにその難易度は増します。孤独防止のためには友人を作るのではなくもっと別の何かを作ることに意識を向けるべきであるのかもしれない。

Special thanks to (N)

## アタマの体操・脳トレ編

脳を活性化しアンチエイジングに最適です。  
お役立て下さい。

問題1 これ、何を表している？

$$1989 = 3$$

$$1989 + 2 = 1997$$

$$1997 + 3 = 2014$$

$$2014 + 2 = 2019$$



問題2 漢字の部首だけで元の四字熟語を当ててください

口 木 心 土



はなしのたねは  
今回で  
最終回

今までご愛読いただき  
ありがとうございました！